

支援者さまと国境なき医師団(MSF)をつなぐニュースレター

2022年 2月号



アフガニスタン、ブースト病院の入り口に設置された看板と警備員。MSFが運営する全ての病院では、武器の持ち込みを禁止している(2011年撮影)。

特集

紛争終結後も続く、医療危機。 アフガニスタンの現状とは？

スタッフの声

**最も苦しんでいるのは
罪のない一般市民たち**

手術室看護師 白川 優子

【新連載】

「助けたい」その思いをつなぐ
こころの手紙

日本からのスタッフ派遣状況

23の国と地域 53人 (2021年12月14日現在)



紛争終結後も続く、医療危機。 アフガニスタンの現状とは？

昨年8月、米国が20年にわたる軍事作戦に終止符を打ったことから、武装勢力タリバンが実権を握ったアフガニスタン。多くの人道援助団体が撤退を余儀なくされる中で、国境なき医師団(MSF)が続ける医療援助活動のいまをお伝えします。



ラシュカルガのブースト病院で腹膜炎の手術をするMSFのスタッフ。中央は手術室看護師の白川優子。

**国際援助の停止によって
さらに不足する医療**

「紛争が終結してからというものの、MSFの病院には人びとが一気に来院しています。以前は患者を他の団体に引き継ぐこともできましたが、それもできません。米軍の撤退が決定して以降、安全上の懸念や資金不足から、国際機関によって援助を受けていたほとんどの医療施設が運営を停止したからです」。そう話すのは、ヘラート市の入院栄養治療センターで、患者の対応に奔走する医療スタッフ。同センターでは栄養失調の患者も急増しています。

MSFは現在、アフガニスタンの5つの地域で医療援助を展開。約100人の海外派遣スタッフと、2300人の現地スタッフ[※]が、タリバン政権樹立後も、命の危機に直面する人びとを支え続けています。

しかし、国際援助の停止に加え、医薬品や医療従事者の不足により地域の診療所もほぼ機能していない状況

況で、MSFがその全ての受け皿となるのは非常に困難です。

**いま求められる医療に
応え続けるために**

MSFは1980年にアフガニスタンで活動を開始。以来、約40年にわたり情勢が目まぐるしく変化の中で医療を提供し続けてきました。

政治に左右されることがなく医療を必要とする人びとへ迅速に届けるには、まず全ての当事者と合意を得ることが不可欠です。近年の紛争下の活動においても、タリバン、米軍、アフガニスタン政府軍などあらゆる関係者と対話し、患者が民間人であっても軍関係者であっても、医療を提供することを説明。私たちの中立の立場を明確にすることで、戦闘激化の最中も活動を維持しました。

新たな局面を迎えたいまも課題は尽きません。ですがMSFは引き続きスタッフ一丸となってアフガニスタンでの医療援助に全力を注ぎます。



●はMSFが活動を行っている地域(2021年12月現在)

Staff Story — スタッフの声

最も苦しんでいるのは 罪のない一般市民たち

アフガニスタンに到着後、目にした光景は、マーケットで買い物をする人びとや、子どもたちが道路で遊んでいる姿でした。女性は顔を出して1人で歩いており、報道とはだいぶ違うのではないかと、と拍子抜けしてしまいました。しかし、私たち医療チームがすぐに直面した問題は、それこそ一切報道されていない現実でした。

政権が交代してから、国際機関がアフガニスタンへの資金援助を停止する動きを見せました。それに伴い公立の医療機関が次々に閉鎖に追い込まれ、多くの患者さんがMSFの病院に駆け込んでくるようになったのです。救急には24時間で800人を超える人が来る日もあり、私が働く手術室は文字通り24時間稼働しっぱなしでした。

特に悲惨だったのは、栄養失調を治療する病棟です。常にベッドが足りず、苦肉の策として1つのベッドに2人の子どもを寝かせていました。いまずぐ助けなくては

手術室看護師 白川 優子

(2021年8月26日から5週間活動)

ならない命のためには仕方のないことでした。

笑顔を見せるスタッフ その心の中は……

一緒に働いていた現地雇用のスタッフたちは一生懸命に医療と向き合っており、その姿には大変感銘を受けました。毎日笑顔を見せてくれていた彼らでしたが、この先どうなるか分からない社会への不安を抱え、実はみな心の中では泣いているのだと知った時には心が引き裂かれそうでした。アフガニスタンには初めて派遣されましたが、ここでもやはり戦争や政治に翻弄され苦しんでいるのは罪のない末端の一般市民たちでした。



アフガニスタンで多くの医療機関が閉鎖に追い込まれる現状を目の当たりにした白川は、帰国後に記者会見を行い、国際社会による援助の継続を訴えた。

紛争地での安全な医療援助のために、 MSFが大切にしている4つのこと

1 「徹底した対話」で全ての 紛争当事者と合意を得る

MSFの病院では一般の患者さんのほかに、対立する軍の兵士が治療を受けることもあります。それを可能にするのが、あらゆる紛争当事者との対話です。医療援助における中立の立場を明確にし、全ての当事者の合意を得ることは、紛争地で安全に活動するための基盤になります。しかし、こうした対話を尽くしても一部の暴力的なグループからの攻撃は避けられないのが現状です。今後さらに細心の注意を払い、医療ニーズに応えていく必要があります。

2 活動地の文化や 宗教を尊重し敬意を払う

さまざまな価値観が入り交じる活動地では「自分たちはあくまでも部外者である」という意識を持つことも重要です。例えばイスラム圏で女性スタッフが活動する際、頭にかぶる「ヒジャブ」もその一つ。その土地の風習に従った装いは、文化や宗教を尊重するだけでなく、思わぬ攻撃から身を守る手だてにもなります。



ヒジャブを着用するMSFの海外派遣スタッフたち。

3 活動資金の独立性を保ち 権力からの影響を受けない

MSFが中立を主張しても、特定の政府から資金援助を受けていた場合、紛争当事者や人びとからの真の信頼は得にくくなります。皆さまからのご寄付で支えられているMSFの資金の独立性は、紛争下での活動を実現する最大の鍵になっています。

4 「質の高い医療」を 日頃から提供する

MSFは日頃から質の高い医療の提供に努めていますが、実は安全管理の面からそれは大きな意味を持ちます。技術だけでなく、患者さんへの接し方なども含め「地域にいてほしい団体」として認められることが、結果的に安全で継続的な病院の運営につながります。

その他にも！



攻撃を受けないために
誤爆されるのを防ぐため、MSFの病院の屋上にはロゴ(ランニングパーソン)が描かれています。



「助けたい」その思いをつなぐ こころの手紙

昨年、国境なき医師団(MSF)設立50年企画の一つとして
支援者の皆さまとMSFスタッフから広く募集した、
それぞれの思いをつづった手紙。今回はその中から2通をご紹介します。



MSFの診療所に来た、アフガニスタンの避難民キャンプで暮らす子どもたち。

“一番苦しい時に差し伸べられた手を、人びとは忘れないはず”

MSFの皆さんへ

このたびのアフガニスタンでの政変に心痛めています。あらゆる機関が手を引いている状況で、MSFが残って医療を続けていることに、深く敬意と感銘を覚えます。また、タリバンとも対話を続けている理由が書かれてあった記事を読み、MSFの独立性を保つ意義を再確認しました。MSFの医療の現場では、政治は関係なく敵味方はなく、銃を置いてからしか病院に入れませんが、どんな立場の人でも助けるという医療の本質が実践されています。

日本の茶の湯では、刀を置いてどんな身分の人も等しく躰口(にじりぐち)から頭を下げて茶室に入ります。そして同じ空間で心を通い合わせるのです。敵味方が共に治療を受ける時、少しでも同じ人間として心が触れ合えたらと願わずにいられません。

一番苦しい時に差し伸べられた手をアフガニスタンの人は決して忘れないでしょう。そして自国に平和と自由が戻った時、きっと彼らが今度は誰かに手を差し伸べてくれるでしょう。スタッフの方々、どうかご無事で活動が続けられますよう日本から祈っています。

支援者 本岡 かおり様 (神奈川県)

“心優しい君のことを、忘れたことはありません”

南スーダンのダックへ

僕のことを覚えているかな? 日本人の外科医だよ。

初めて会った時は6歳くらいだったね。偽物のマラリア薬の筋肉注射で、お尻に大きな膿(うみ)の溜まりができて救急外来にきたね。手術をしてすっかり良くなった君は、毎日病院の入り口で僕のことを待ってくれてたね。治してくれてありがとうって言うために。「僕は将来この病院で働くんだ」って、いつも僕に言ってたね。心優しい君は病院の入り口で困っている患者さんの案内もしていた。帰国の朝、僕にいつ帰ってくるの?って何度も聞いたね。そうだな、いつか帰ってくるよ、としか言えなかった。ずっと手を振ってくれてたのが飛行機の窓から見えてたよ。

あれからもう13年。大人の男になった君はいまも困っている人を助けているかな? それとも兵士になって戦闘に参加しているんだろうか。君のことを忘れたことはないよ。僕はいまも援助活動を続けています。ダック、お願いだから元気で生きていてほしい。いつか会える日を願っています。

MSFの外科医 村上 大樹



初の海外派遣で、スーダン(現・南スーダン)へ赴いた村上。

スマートフォンから▼



手紙の朗読イベントを行いました!

昨年11月、スペシャルゲストが皆さまやスタッフからの手紙を朗読するイベントを開催しました。その際の動画はこちらから

ニュースレター

ACT!

2022年2月号

発行元

特定非営利活動法人 国境なき医師団日本

〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 FORECAST早稲田FIRST 3階

寄付・登録情報に関するお問い合わせ

TEL 0120-999-199

通話料無料

平日9:00~18:00/
土日祝日、年末年始休業

※ご住所に変更がある場合は、上記までご連絡ください。

※新型コロナウイルス感染症対策により、場合によっては寄付によるお手続きや領収書の発行といった、事務対応に遅延が発生する可能性があります。何卒ご了承くださいませようお願いいたします。

遺贈に関するご相談・お問い合わせ

TEL 03-5286-6430

担当者直通

平日10:00~17:00/
担当: 荻野、今尾

国境なき医師団は、世界約70の国と地域で活動する、民間で非営利の医療・人道援助団体です。紛争地や自然災害の被災地、貧困地域などで危機に瀕した人びとに、独立・中立・公平な立場で緊急医療援助を届けています。
年次活動報告書 www.msf.or.jp/library/annualreport/

ぜひチェック＆フォローしてください

公式ウェブサイト

www.msf.or.jp



Facebook
@msf.japan



Twitter
@MSFJapan



Instagram
@msf_japan



LINE
@msf_japan



YouTubeチャンネル
国境なき医師団日本

最新ニュースやイベント情報、メディア出演情報などお知らせ

活動中のリアルな風景や、
スタッフ・患者さんの姿をご紹介

最新ニュースやイベントのご案内、
スタッフの活動レポートなど

音や風景とともに活動地の
様子が分かる

ご確認ください

●領収書のお届けについて

2021年に入金いただいたご寄付の領収書の発送は、本年1月末までに終了いたしました。ご不明点などは、0120-999-199までお問い合わせください。例年、この時期は電話が大変混み合います。早めにご連絡をいただけますようお願いいたします。

●確定申告について

国境なき医師団日本への寄付は寄付金控除の対象となります。当団体の領収書を添付の上、認定NPO法人に対する寄付として確定申告を行うことで、税金が還付されます。確定申告に関する詳細は、最寄りの税務署または国税庁のホームページ www.nta.go.jp をご確認ください。